



京都を都と定めた風水地理学

桓武天皇の英断とは

延暦 13 年(794)10 月辛酉(かのととり・しんゆう)22 日、山城国葛野郡(やましろこくかずらのぐん)に平安京が建都されます。『日本記略』の同年 11 月 8 日には「此の国は山河襟帯(さんがきんたい)にして自然(じねん)に城を作す。この形勝によりて、新号を制すべし。よろしく山背国(やませこく)を改めて、山城国(やましろこく)となすべし。また、子来の民、謳歌の輩、異口同辞し、号して平安京と云う」とあります。

平安京が造営されて、大和からみて山の後ろ「やまうしろ」から転訛したと考えられる「山城」の命名は多くの示唆をもっています。日枝山(ひえ)が比叡山になったと言われているように、夏至の朝日が都に差し込む位置であるのです。

不思議なことに下賀茂神社の糺の森(ただすのもり)と、蚕の社(かいこのやしろ)の元糺(もとただす)と比叡山が夏至の日にライン上に並びます。

最初の天皇のお住まいである御所はフツと息を吐くと千本丸太町に一番良い 気がたまつたとされ、お住まいが千本丸太町に造られたと言ひ伝えられているのです。

比叡山が 848.6 メートルの高さで東に琵琶層があり、「琵琶湖ができて、その土で富士山ができた」という伝説が古くからあります。その比叡山の山頂から清龍が息を吹いたことから四神相応(しじんそうおう)の都の風水地理学が始まります。

四神相応とは

京都盆地の四隅に想像上の神、青龍、朱雀、白虎、玄武が都を守ると考えられていて、中国では紀元前から天地を往来する最強の神獣とされました。千年間、都であったまちは世界史的にみても珍しく、これが京都の誇る絶対差であります。





25-Jun-18

そこには王朝文化や雅な文化をつくりだした町衆の底力がありました。人間に記憶があるように、土地に記憶があるなら千年の都の記憶はピンチがチャンスの歴史であり、栄枯盛衰を繰り返してきたまちが京都であります。

応仁の乱や明治維新というピンチの折、京都が生き延びた理由は何か。それは伝統産業と最先端技術をコラボさせて、挑戦し続けた町衆の存在が挙げられます。1074 年間、都だったエネルギーが満ちたまち・町衆の歴史があります。

「景観 10 年、風景 100 年、風土 1000 年」と言われますが、ノーベル文学賞受賞作品『古都』には京都の地形と自然の美しさが描かれています。川辺、山辺から見た京都の風景が何回も登場します。京都市民は毎日山を見て暮らしているので、自然の変化に敏感です。京都は川辺、山辺の景色や美しさが魅力の一で、鴨川、桂川、宇治川等と比叡山や東山、西山等に囲まれた盆地で、この魅力を川端康成先生は本質的によく理解されていたことがわかります。人間も自然の一部であると、自然に対して謙虚な気持ちで山をご覧になっていたのでしょう。

京都のころとは何か

2002 年 2 月 20 日の京都新聞に「京都のころ」と題して河合駿雄文化庁長官が映画「二人日和」について述べておられます。

『日本人は古くから「もの」と「ころ」の区別をしなかった。川面の輝き、木漏れ日、そして着物にも、すべて「ころ」があった。そのような感じがこの映画全体によくでていて、「京都のころ」が伝わってくる。京都のころが描かれている』と。

この映画も河合長官が京すずめ学校にお出ましを頂き、映画の予告編をご覧いただいたことから、京都シネマでの映画観賞へとつながりました。

